

中国での国際シンポジウムに参加して —重慶と杭州—

来年の北京オリンピックを控え、中国の経済はめざましく発展していますが、同時に公害や環境汚染問題も発生しています。中国の重慶と杭州で開催された環境問題に関する日中韓シンポジウムに参加しましたので、報告いたします。

日中韓環境分析シンポジウム

平成18年9月14日～18日に、重慶市郊外の西南大学で表記のシンポジウムが開催されました。日本、中国、韓国で環境分析を行っている大学、国公立の研究所、民間の分析機関の研究者や技術者が、東アジアの環境問題、分析方法の開発や評価について発表し、意見交換を行いました。

重慶（四川省）は、中国の内陸部に位置している重化学工業都市で、大気汚染が進んでいる都市としても知られています。そこで、中国の環境汚染の現状を自分の目で確かめたかったこと、環境分析技術のレベルを知り、研究者や技術者と交流を図る目的で参加しました。参加者は、日本から22名、中国から80名、韓国、その他の国から6名が参加し、招待講演15件、口頭発表41件、ポスター発表38件でした。

今回は「硫黄酸化物の大気汚染を日本はいかに克服したか」という演題で招待講演を行いました。内容は、日本の大気汚染の歴史、公害防止の法律の整備と変遷、燃料の転換、脱硫技術、硫黄酸化物分析方法を紹介した後、産技研で開発した燃料中の硫黄分、排ガス中の硫黄酸化物分析方法と連続分析装置について紹介しました。

シンポジウムでは、中国の参加者から日本が大気汚染や水質汚染などの環境問題をどのように解決してきたのか質問を受けました。日本では、(1) 公害や環境問題がひどかった昭和40年代に公害を防止する法律を制定し、(2) 大気や水質を汚染する物質の除去方法や装置の開発と企業での設置、さらに、(3) 工場の排ガスや排水の分析技術、モニタリング技術の開発を行い、これら3つの対策により環境汚染を解決してきたことを説明しました。また、環境汚染防止の資料や文献を差し上げて、交流を図りました。

最終日に重慶市内を見学しましたが、市内を流れる長江の対岸がかすんで見えにくく、やはり大気汚染の影響であると、地元の学生さんが教えてくれました。その後、12月15日の朝日新聞朝刊では、同じ四川省の上流にある世界遺産の「楽山大仏」にも酸性雨の影響があると報道されていました。



図1 重慶市内を流れる長江の対岸を望む
大気汚染の影響で対岸がかすんでいました

日中韓イオンクロマトグラフィーシンポジウム

平成18年11月28日～30日に、杭州市の浙江大学で表記のシンポジウムが開催されました。

参加者は、日本から21名、中国から150名、韓国から15名、その他の国から10数名が参加し、口頭発表25件、ポスター発表91件でした。

このシンポジウムは、イオンクロマトグラフィーに関する研究者や技術者の集まりで、環境分析、材料や製品等の品質管理などの研究発表と情報交換の場として2年に1回開催されています。今回は、産技研で開発した「化学反応を利用した簡便なイオンクロマトグラフィーによる環境分析」という演題で口頭発表を行いました。内容は、装置内に内蔵されている電気伝導度検出器では測定できない環境汚染物質であるシアン化合物、ホルムアルデヒド、塩素などを、測定可能なイオン種に変えて簡便に測定する方法、排ガス中のハロゲン化合物を同時測定する方法について報告しました。この詳細は、分析化学、54、191（2005）に掲載されていますので、ご参照、ご利用ください。

研究開発部第二部 資源環境グループ <西が丘本部>

野々村誠 TEL 03-3909-2151 内線349

E-mail: nonomura.makoto@iri-tokyo.jp